

第69回京都府^{そさい}蔬菜原種審査会(葉ネギ)を開催

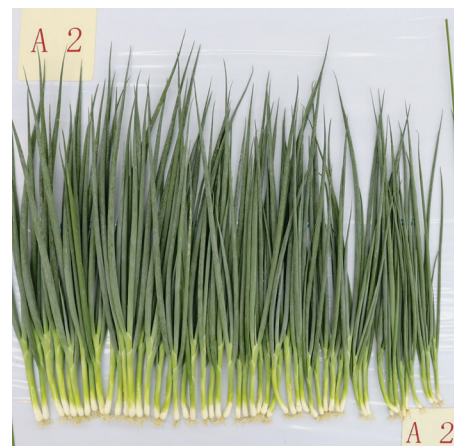
7月19日、当センターにおいて、京都府種苗協会主催の葉ネギを対象とした京都府蔬菜原種審査会^{*}が開催されました。本審査会は、現場での生産に適した優良野菜品種の開発普及を促進することを目的とするもので、当センターは栽培と審査会の運営及び審査を務めました。

当日は、府内外の種苗会社6社から出品された16品種について、当センター栽培技術開発部、京都府農産課、各種苗会社の審査員12名が、ほ場での生育状況及び収穫物を審査しました。その結果、葉身がまっすぐで生育の揃いが良く、葉色の濃い4品種を入賞品種として選定しました。

※蔬菜原種審査会^{そさい}:蔬菜(野菜)の販売用に増殖を行う前の種子を用いて栽培や収穫物を評価する会合



立ち毛^{たちげ}審査の様子



1等に入賞した葉ネギ

試験研究課題:黒大豆エダマメを栽培する大規模営農組織における栽培
技術体系の確立と販売力の向上

(1)環境負荷を低減する持続可能な管理技術の開発②病害虫管理技術の
開発

黒大豆エダマメにおける害虫の発生時期の把握

黒大豆エダマメは害虫による被害が大きい品目で、通常化学農薬による防除が行われています。一方、国は「みどりの食料システム戦略」を策定し、2050年までに化学農薬の使用量を50%低減する目標を設定しています。

そこで、当センターでは化学農薬使用量の低減を目指し、エダマメ主要害虫の発生消長に応じた効果的な防除体系の確立に向けて取り組んでいます。今年度は、現地ほ場における早生から晩生の異なる品種別の害虫発生状況やエダマメの被害状況を調べており、これまでのところ、早生品種では地域によってダイズサヤタマバエによる莢の被害が多いことが分かっています。

今後は調査を継続するとともに、害虫に対する忌避植物の活用など農薬以外の防除方法についても検討します。



黒大豆エダマメ(京丹波町)



黒大豆エダマメの害虫
(矢印)ダイズサヤタマバエ幼虫

より優れた抵抗性マツを供給するための接種検定

当センターでは、松林を守るために、松くい虫被害に強い「抵抗性マツ」[※]の開発をつづけています。その開発に欠かせない接種検定を場内の試験ほ場で実施しました。

当センターでは、選定・登録された抵抗性マツの品種からなる採種園から得た種子を配布用に生産しています。選定された抵抗性マツはマツノザイセンチュウの感染に強いのですが、抵抗性マツ同士が交配した「子供」には強弱が現れます。そのため、この採種園から得た種子から苗木を作り、それにマツノザイセンチュウを接種して感染の強弱の検定を行います。

種子を普及するにあたり、今後も子供が弱いものを採種園の親マツから除外していきませんが、選ぶことで親の数が減りすぎると、多様性が失われ種子生産に支障が出るため、親の数が減りすぎないように、抵抗性マツを開発しつづける必要があります。

※ 抵抗性マツ:松くい虫被害の原因となるマツノザイセンチュウの感染に対する抵抗性があると認められたマツを抵抗性アカマツ・クロマツと呼ぶ。



2年生アカマツ苗木にマツノザイセンチュウを接種しているところ

スギ、ヒノキ採種園で着花促進処理を実施

当センターでは、優良な種苗による人工造林の普及をめざして、造林苗木生産事業者へ配布する良質な種子の安定供給に取り組んでいます。

スギ、ヒノキの採種園で着花促進のためのジベレリン処理^{※1}を行いました。スギやヒノキではジベレリン処理は、毎年種子を安定的に生産するために必要な作業です。

花粉の少ないスギミニチュア採種園^{※2}では、ジベレリン処理は葉面散布としました。処理の適期は、花芽の分化時期となる6月末から7月末です。今年は、季節の変化が早めに進んでいることから7月上旬の散布としました。

※1 ジベレリン処理:ジベレリンは、植物ホルモンの一種で生理作用を調整する。スギやヒノキでは、着花が促進される。処理は、ジベレリンの水溶液散布または粉末状のジベレリンを樹幹に埋め込むなどの方法をとる。

※2 花粉の少ないスギミニチュア採種園:花粉の少ないスギは、雄花をわずしか着けず花粉をほとんど飛散させない特性を持ったスギの品種。採種木の樹高を低く抑えた小型の採種園をミニチュア採種園と呼んでいる。



スギミニチュア採種園でのジベレリン処理の様子(葉面散布)

ブドウ系統適応性試験の袋掛けが完了

当センターでは、農研機構が育成した新しいブドウ4系統※(安芸津31号、32号、33号、34号)について丹後地域における適応性を検討しています。

6月下旬に1房当たりの粒数を揃え、7月3日に病害虫から房を守るために袋掛けを行い、さらに7月12日には、鳥害防止のために防鳥ネットを設置しました。

今後、8月中旬から順次収穫し、新しい系統の果実品質、収量を調査しますが、複数年にわたってデータを蓄積した上で、丹後地域に適した有望系統を選定します。これら系統が品種登録された時点で、既に丹後地域における栽培データが得られているため、生産者が新品種をスムーズに導入できます。

※ 系統:品種名が命名される前の段階を示す仮の名称



粒数を40粒にそろえた
「安芸津33号」の房



袋を掛け、防鳥ネットを設置

茶品評会審査会の運営をIT化

茶の栽培・製造技術の改善による府内産茶の品質向上を目指して、京都府茶品評会審査会が、7月4～5日に宇治茶会館で開催され、当所職員が審査員、審査補助員を務めました。審査会は、煎茶、かぶせ茶、玉露、てん茶の部に分かれ、それぞれ外観、内質(香り、色、味など)の審査が行われました。

当所は、審査を担当するとともに、審査の補助員として、茶業団体、関係農業改良普及センター、JAと連携し、審査用見本茶の準備や得点記録の集計など、円滑な審査会運営につとめました。特に本年から、審査得点や指摘を手書きでの記録から、PCを用いた審査番号のバーコードからの読み込みによる記録に変更するなど、審査運営のIT化と効率的な運営を目指して取り組みました。

今後は審査会で指摘された栽培、製造工程での改善点について、関係農業改良普及センターなどを通じて出品者に伝えるなど、生産技術向上を支援します。



外観審査を行う審査員



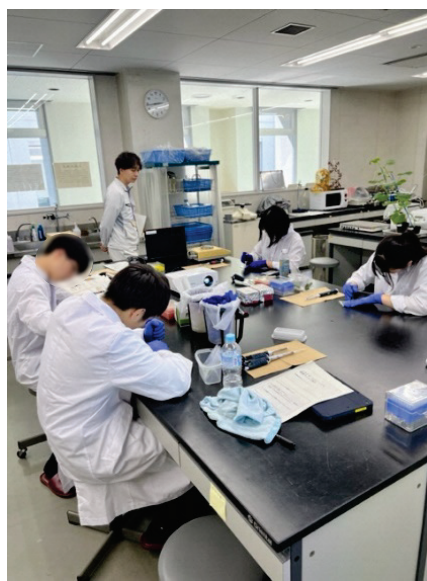
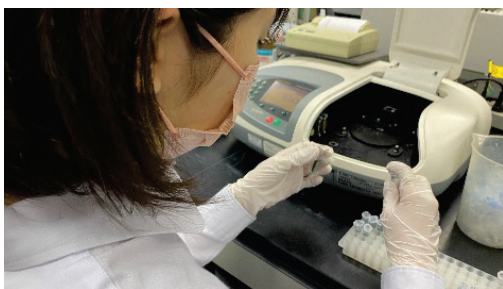
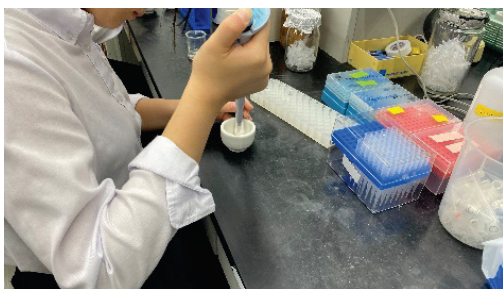
バーコード読み取り装置を用いて審査の記録を行う審査補助員

西舞鶴高校のスーパーサマーキャンプ

7月28日に府立西舞鶴高校理数探究科8名の生徒が、夏のサイエンスキャンプ(科学体験合宿)の一環として、当センターを訪問され、当センターの研究全般について、座学や実習を通して紹介しました。

実習では、基礎研究部では米のタンパク質含量を調べる実験を、応用研究部ではキュウリに感染するウイルス病の診断実習を、それぞれ行いました。参加された生徒からは、多くの質問が寄せられ、興味深く実習に取り組んでいました。

今回の当センターへの訪問が、これからの勉強や進路選択に何らかの参考になることを期待するとともに、広く府民に開かれた研究機関として取り組んで参ります。



米のタンパク質含量測定実験(左)とキュウリのウイルス病の診断実習(右)の様子

施設公開で畜産の魅力発信

7月26日(水)に「もっと畜産が好きになる一日を満喫しませんか？」をテーマに施設公開を行いました。猛暑のなか195人の親子が訪れ、乳しぼり、えさやり、心音の聴診など牛を身近に感じたり、アイスクリームを作ったり、研究内容の紹介や実験を交えた畜産ミニ教室など、盛りだくさんの体験を楽しむ一日となりました。

体験を通じて、「乳しぼり難しかったけど楽しかった」「牛のおっぱいは温かくて張りがあった」「畜産ミニ教室は、知らないことばかりで勉強になった」などの感想をいただきました。

8月には、児童発達支援団体の酪農体験や、高校生以上を対象にした「酪農の仕事1日体験会」を予定しており、今後も体験会を活用した畜産の魅力発信を継続します。



乳しぼり体験の様子



子牛とのふれあい



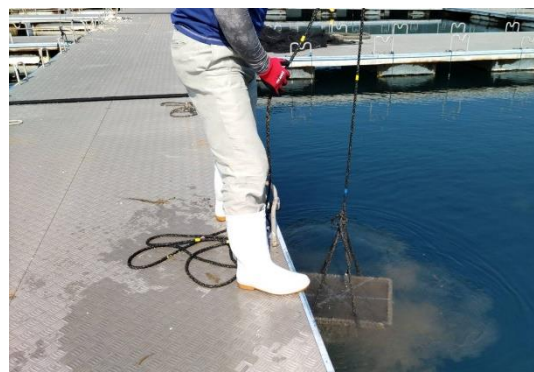
畜産ミニ教室「鶏について」

アサリの^{すいか}垂下養殖試験を開始

アサリの産地偽装が発覚して以降、純国産アサリの需要が高まっています。京都府では舞鶴湾、久美浜湾および阿蘇海で、京都府阿蘇海産のアサリ稚貝を用いた垂下養殖が営まれています。

特に舞鶴湾ではアサリ養殖組合の発足により、ここ2,3年で参加者が増え、府内産養殖アサリの主産地となりつつあります。しかし、同湾におけるアサリ垂下養殖は始まったばかりで、高品質なアサリを効率的に生産するための養殖条件(垂下水深、養殖密度、養殖期間など)に関する知見が不足しています。そこで、当センターでは、これらを明らかにすべく、今年度から垂下養殖試験を開始しました。

阿蘇海産アサリを親とし、当センターで生産した種苗を用い、7月から舞鶴湾および栗田湾(当センター施設)において、様々な条件下での養殖試験を実施中です。今後、3カ年で最適な養殖条件を明らかにするとともに、養殖マニュアルの作成により技術の普及を図っていきます。



垂下養殖試験の様子(左:飼育容器に収容したアサリ稚貝、右:飼育容器を海中に垂下)